ポケットモンスター　OUR BEST FRIENDS

かぎっこまんじろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　ＯＵＲ　ＢＥＳＴ　ＦＲＩＥＮＤＳ

【Ｎコード】
Ｎ４２５３Ｔ

【作者名】
かぎっこまんじろー

【あらすじ】
ポケモンをもっと楽しんでもらいたくて書きました。
「泣きゲー＋とあるシリーズ」風？に書いています。

Prologue1　シロガネ山の激闘

シロガネ山、それはカントー地方とジョウト地方の中間にそびえ立つ。正確にはジョウト側に位置する。その荘厳な山肌は見る者にそのまま自然の厳しさを伝える。実際、シロガネ山はその環境の厳しさと生息しているポケモンの強さによって立ち入りできる者の制限が行われている。

今日午前、シロガネ山の麓は晴れだった。しかし、午後になると一転し、辺りは白銀の世界に呑まれつつあった。標高が増すにつれ、降雪というよりは吹雪に近くなる。山の天候は変動しやすい。

波切律（なみきりりつ）、彼はそんな天候の中、ある目的で現在シロガネ山洞窟というダンジョンに挑んでいる。

リタ、彼女（？）は律の所持しているポケモン、リザードン（♀）のニックネームである。そのリタはモンスターボールには入れられておらず、律と並列に歩いている。彼らは凍ってしまって滑りやすくなってしまったダンジョンの地面に注意しながらも時々足をすべらせていた。

「寒ぅっー」

律はリタの尻尾に灯っている炎に手をかざす。寒いのも無理はない。洞窟内の気温は氷点下を優に達している。

「リタの尻尾は暖かくて便利だなー」

それに続きリタも呼応し「ぐぉ〜」と鳴く。

「それにしてもレッドってのはよくもまぁこんな秘境と言わんばか

りの極寒の地にいるよなぁ。自殺行為だぞ…」

寒さに対する苛立ちのせいか、律はぶつぶつとぼやく。ただレッドという人物の目的が全くもって理解出来ないのは律だけではない。ロケット団をたった一人で壊滅させた上に、全国に六つあるポケモンリーグ全てを制覇している。それがレッドという人物だ。他にはどうやら実家はマサラタウンにあるということだけで、それ以外の詳細は不明。律同様ＪＰＵ（日本ポケモンリーグ同盟）の一員だが会合には一度も顔をだしていない。謎に包まれた人物だ。

しかし、ここにいる二十歳まじかの青年波切律も同様にロケット団の復活を阻止しており、全国制覇もしている。そしてレッド同様謎の多い人物でもある。

「寒ぅ〜っ。ホカロンとか持って来たらよかったなー…」

しかし律の場合はこういった普通の言動をしているので日頃他人から謎が多いと思われ詮索を受けることはない。むしろ詮索されないようにいるのかもしれない。自分の傷を見られて他人を変に心配させたくないのだろう。彼には辛い過去がある…。

そうこうしている間に白い外気が洞窟内に吹きつけている直径２メートルほどの隙間を見つける。そこを抜けると頂上だ。

洞窟を出るとそこは純白の世界だった。猛吹雪が視界を遮る。

暗中模索で少し進んだ時だった。吹雪がまるでこれから始まるで

あろう戦いの開幕を告げるように律達のいる周辺だけその勢いを失っていた。同時に律の視界に入るのは一人の青年…レッド…。帽子を深くかぶっているため顔はよく見えない。そのレッドの傍らには一匹のポケモン…ピカチュウがチョコンと立っている。可愛らしい容姿とは別に貫禄を感じさせる。

レッドはモンスターボールを取り出している。どうやらピカチュウを初っ端から出す訳ではなさそうだ。

（それじゃポケモンバトルといきますかぁ…）

「リタ、今はまだいい。お前は切り札だからな」

リタも同様に初っ端から出すまいと律もボールを取り出す。一方、律に指示を受けたリタは律の2～3メートル後ろに立つ。

なぜ律はリタをボールに戻さないのか、それはリタが単純にボール嫌いだからだ。リザードンとなってしまうとボールに入れていない場合かなり不便だ。ときどき律はそれによって悩まされる。例えば、モンスターボールに入らないことでポケモン自動回復システムの影響がない。ポケモン自動回復システムとはモンスターボールにポケモンを入れておくことでいかなる外傷も丸1日で治してしまうというもの。その便利さゆえにポケモンセンターの本来の役割は失われ、ポケモンセンターはその数を減らしている。ただ、今残っているポケモンセンターはポケモントレーナー達のコミュニティーの場所という役割を生かして様々な取り組みを行っている。しかし困ったことにこういうモンスターボールに入りたがらないポケモンにとってはそのシステムは過酷でしかない。いかなるものにも欠点はあるのだろう、律は度々そう思う。

レッドのピカチュウも同じみたいだ。レッドもまたピカチュウをボールに戻していない。

両者共に切り札を出さずにボールからポケモンを出す。

ポケモンマスター同士の闘いがはじまった。

律とレッドのポケモンバトルは激闘だった…。

（結局こーなるんだな…）

吹雪の中、二匹のポケモンが対峙している。どちらもトレーナー達が切り札としていたものだ。

「リタ…俺達の力を見せてやろう！」

律がそういうとリタもそれに呼応して「ぐぉぁー！」と雄叫びを上げた。

（思えばリタとは本当に長い付き合いで、こんなところまで来れたのもリタがいてくれたからだな…。だからさ…）

「楽しもうっ！！」

律がそう言ったのを合図に二匹のポケモンはそれぞれ火炎または電撃を体中から放ちながらお互いの体でぶつかり合う。そして二匹は反動でその間に距離が生じる。

律もレッドも同じ考えなのか反動の僅かな隙に攻撃を指示する。

「リタっ、『クロスフレイム』！！」

律がそう叫ぶとリタの体からより一層の火炎が放射される。この技は伝説のポケモンレシラムしか修得することが出来ない技だが、今ここにその技を修得している例外が存在している。それがここにいる一匹のリザードンだ。

（…！？）

律はレッドのピカチュウの行動を見て驚くしかなかった。そこには『クロスフレイム』と対極するような電撃を放っているピカチュウがいた。

（『クロスサンダー』…！？まさかあいつも…）

火炎と電撃が…それぞれが影響し合わないはずのエネルギーがその現実を打ち消し合うように今交錯した。それが『クロスフレイム』（レシラム）と『クロスサンダー』（ゼクロム）の関係性を示唆するように爆発を引き起こす。

（やばい…爆風でリタが見えない…）

律は相手の予想外の攻撃に視界だけではなく戦意まで眩みそうになる。それほどにピカチュウの技に圧倒的な強さを感じてしまったからだ。殺伐ささえ感じる。

（でも…見えなくてもあいつは…リタはきっと…いや絶対にあそこに立って俺の声を待ってくれているはずだ！）

「リターーーっ！！」

律は叫んだ。それはただの叫びではない。彼らの絆を結び付けるものだ。
その声に反応してぶぉんっ、と音を立て辺りに立ち込めていた煙が払拭され、そこにはふらつきながらも一対の紅翼で羽ばたくリタがいた。

「……」

だが、律の眼前に広がる光景は安堵だけを与えるものではなかった。

「なんだよ…あれ…」

吹雪の中ボロボロのリタと対極しているのは傷一つなく宙に浮いているピカチュウだった。『でんじふゆう』なんて甘いものではなくそこには青白い閃光の双翼を背に持ち、それを羽ばたかせていた。そしてレッドが何かを指示するとピカチュウが微量に青白い電気を放電し始め、吹雪はまるでピカチュウを取り囲むように吹き始めた。それは本当に天使みたいな圧倒的な存在を感じさせていた。

（そんな…無理だ。負ける…）

その光景が与えるものは絶望だった。
人は歓喜と等量の絶望を与えられるのだろうか、律はその光景からそう感じた。そして目の前にいる天使（ピカチュウ）が神のように思えてきた律はそんな歓喜と絶望のバランスを決めるのも全ては神なのだろうかと考えてきてしまっていた。

―無理だ―

神とはなぜそんなにも冷徹なのだろうか。俺はそれに抗えるのか。
全てが閉ざされてしまいそうだった。いつかのように…。

…。
俺はその日全てを失ったんだ。
家族も家も何もかも…。
寒い冬の日だった…。
なのに焼けきった家の周りは痛切に暑かった。
その暑さには真冬でも温かさというものが感じられなかった。
次第にその暑さも消え、雪まで降ってきた。
すると、なんだかいきなり寂しくなってきたんだ。
心も体も冷えきった。
…。
でも、急に温かくなったんだ…。
なんでだろう？
…。
俺の横に一匹のヒトカゲがいたんだ。

「ぐあぉぉーー！！」

リタが今までに無いぐらいの大声で鳴いた。それで律は我に帰る。

（リタ…そうだよな…あのときのまんまだなこれじゃ…）

―無理なんかじゃない―

律は思いっきり自分の頬を両側から叩いた。

「さって、神に抗ってやろうじゃなねーか。俺達は絶対に負けないっ！！」

「ぐあぉー！！」

律とリタはそこでやっと絆を取り戻した。いやそれ以上にもう二度と離れられないぐらいのものになっているのかもしれない。

「リタっ！いくぞっ！」

「ぐおぁー！！」

……。

これがリタとの最後のポケモンバトルだった…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4253t/

ポケットモンスター　OUR BEST FRIENDS

2011年10月7日22時21分発行